

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：58001

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520592

研究課題名（和文） 近世琉球寺院の社会的機能の解明—私寺の分析を中心に—

研究課題名（英文） The elucidation of the social function of a modern Ryukyu temple

研究代表者 下郡 剛（SHIMOGORI TAKESHI）

沖縄工業高等専門学校 総合科学科 准教授

研究者番号：50413886

研究成果の概要（和文）：近世琉球寺院の社会的機能の一端が、宗派によって異なることを明らかにした。臨済宗は葬礼仏事について、真言宗は占い・祈祷についての社会的機能を果たすことで、王府からの経済的支援を受けることのできない私寺は生き残りを図っていたことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：The end of the social function of a modern Ryukyu temple showed clearly that it changes with cults. Rinzai sect took charge of the funeral service Buddhist service. The Shingon sect took charge of the prayer with fortune-telling.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近世史、琉球史、仏教史

1. 研究開始当初の背景

前近代琉球史研究は、伊波普猷の先駆的研究以後、高良倉吉『琉球王国の構造』（1987年、吉川弘文館）、そして近年の豊見山和行『琉球王国の外交と王権』（2004年、吉川弘文館）に至るまで、政治と外交を中心的な論点としてなされてきた。その根底にある問題意識は、日琉同祖論（伊波）・琉球王国論（高良）・従属的二重朝貢国論（豊見山）などに見られるように、日本との関係をどのように位置づけるかにあり、被支配者階級を含む琉球社会そのものを対象とした歴史学研究は、民俗学的手法による分厚い蓄積に相反して等閑視されてきた。

このような琉球社会史研究の現状の中でも、特に本研究が対象とする仏教寺院は、日本と異なり墓守の機能を有さないため、地域社会に深く根ざしたものとは見なされず、さらに研究が希薄な分野の一つといえる。前近代を対象にした比較的まとまった研究としては、島尻勝太郎『近世沖縄の社会と宗教』（1980年、三一書房）・平敷令治『沖縄の祭祀と信仰』（1990年、第一書房）・知名定寛『沖縄宗教史の研究』（1994年、榕樹社）を挙げることができるにすぎない。

しかも、僅かに存在するそれら琉球仏教史研究は、歴史学的手法によるものでは、薩摩藩による宗教統制や鎮護国家仏教としての

意義など、論点の中心はあくまでも政治・外交にリンクする範囲の中にあり、他方民俗学的手法では、民間行事・習俗の中に僅かに垣間見える仏教思想をいかに発見・抽出するかという手法がとられてきた。

前近代、王府が公認した寺院は、政治的・経済的支援を付与されたが、他方で、そのような支援を受けられない寺院も那覇を中心に多数存在した（下郡剛「琉球における寺院と茶」『中世寺院の姿とくらし』）。このような私的な寺院は、何かしらの社会的機能を有さなければ、経済的に存続しえなかったはずであるのだが、かかる視点に立った研究は皆無である。

さて、那覇の東100キロほどに位置する久米島には、現在も多くの「家文書」が残されており、近年、日本学術振興会科学研究費補助金により、京都大学・横山俊夫氏を中心に本格的な調査が行われた。私自身これに従事し、上江洲・與世永両家の文書目録を作成した際、同島の地方役人を務めていた上江洲家に、多くの私的な寺院と交わした文書が残されていることを発見した。上江洲家文書を見る限り、同家には他の沖縄地域と異なる特別厚い仏教信仰は見あたらない。それにも拘わらず、何故、同家は仏教寺院との関わりを構築・維持する必要があったのか。このことを調べることで、前近代、仏教信仰の薄い琉球社会で、王府から経済的支援を受けられない寺院が何故多数存在しえたのかを解明する端緒が開かれると考える。

さらに、研究代表者の勤務校、沖縄高専所在地の沖縄本島北部地域には、近年、今帰仁村歴史文化センター・名護市史編纂室らの調査によって、久米島同様多くの「家文書」が残されていることが明らかになってきた。久米島と沖縄本島北部地域はともに、沖縄戦で激しい地上戦を経験していないという共通性を持っており、文書の残存数の多さはそれに起因すると思われる。さらに本島北部地域は、沖縄本島内ではあるが、久米島と同じく、首里王府からの距離100キロ前後に位置し、しかも王府との交通手段の中心は久米島同様海上交通という共通性も持っている。そこで久米島等、沖縄本島周辺の離島（慶良間諸島・渡名喜島・粟国島）及び沖縄本島北部地域（名護・今帰仁）を、王府外周辺地域と位置づけ、久米島研究で明らかにした成果をもとに、比較研究することで、近世琉球寺院の社会的機能を明らかにしたい。

2. 研究の目的

琉球寺院の社会的機能を解明する上で、本研究では、寺院の中でも、真言宗寺院の私寺に分析対象を絞って研究することを意図している。

前述したように、近世期の琉球王国には、

真言宗寺院と臨済宗寺院のみが存在したのだが、真言宗寺院には、臨済宗寺院が有していた、外交の一翼を担うという機能が存在しない。外交・貿易こそが国家経済を支えていた琉球王国の中における真言宗寺院は、王府との関係が相対的に希薄な存在とあってよい。臨済宗寺院が首里城近辺に集中しているのに対して、真言宗寺院が那覇に集中しているのは、王府との関係の強弱によるものと考えられる。その真言宗寺院の中でも、さらに王府からの経済支援を受けることができない私寺にこそ、国家の枠組みから離れた、寺院の社会的機能がより強くにじみ出てくると予測する。

さらに、真言宗寺院が集中する那覇は、地方と中央を結ぶ海上交通の要所であり、地方役人が首里王府に向かう際は、那覇が拠点となっていた。このことと、上記した上江洲家の事例を併せ考えると、地方役人層と真言宗の私寺とは深い結びつきがあったものと予測することが可能であり、実際の上江洲家と関係が見られる寺院は真言宗寺院に限定されている。

本研究では、首里王府外周辺地域（久米島・沖縄本島北部の名護と今帰仁・慶良間諸島・渡名喜島・粟国島）の地方役人層と真言宗寺院の私寺との関係を明らかにし、それらの寺院が在地社会に果たした役割を解明したい。

3. 研究の方法

(1) 地方役人階級側についての史料調査活動では、那覇市史編纂室・浦添市立図書館沖縄学研究所・久米島自然文化センターと連携を取りながら、久米島・上江洲家文書の研究を行う。那覇市史編纂室・浦添市立図書館沖縄学研究所には上江洲家文書のコピーの一部が架蔵されており、最初はコピーされた文書から調査を開始する。その後、必要に応じて、上江洲家文書原本を管理する久米島自然文化センターに出向いて文書調査を継続する。さらに、清明祭や旧盆など主要な民間行事の期間中には、できる限り久米島現地に赴き、民俗学的調査も積極的に行い、古文書に見える仏教儀礼と現状との比較検討を行う。

(2) 寺院側の史料調査活動について。近世期の寺院は那覇・首里に集中しており、同地域は沖縄戦で大きな被害を受けた。そのため、琉球寺院の側には史料が残っていない。したがって、最初にするべきことは、日本の寺院に、どの程度、琉球寺院に関する史料が存在するのかを調査することである。具体的には、琉球真言宗寺院と密接な関係を有する高野山金剛峯寺についての予備調査を行う。

(3) 位牌や骨壺など、文書以外の資料の基

礎研究も開始する。この方法による研究により、特に臨濟宗寺院の社会的機能とリンクしてくるものと考え、各家における信仰とダイレクトに直結しているため、調査が困難な分野である。そのため、これまで文献史学の立場からの研究は皆無に近い。基礎的研究を始める段階にある。

4. 研究成果

(1) 上江洲家文書をはじめ、琉球の地方役人文書ならびに地方役人の日記を検討することで、近世琉球の真言宗寺院の社会的機能の一端が占い・祈祷に対する社会的要請に応えることであったことを指摘した。また、この機能は、特に王府からの経済的支援を受けることのできない私寺により強く見られることを指摘した。

(2) 真言宗との対比、との視点から、臨濟宗寺院についても検討した。方法としては、真言宗の場合と同じく、琉球の地方役人の文書ならびに地方役人の日記を検討対象とした。その結果、近世琉球の臨濟宗寺院の社会的機能の一端が葬送・追善に対する社会的要請に応えることであったことを指摘した。また、この機能は、真言宗と同じく、特に王府からの経済的支援を受けることのできない私寺により強く見られることを指摘した。

(3) 位牌や骨壺に関する基礎データの集積を進めた結果、研究分担者として参加している科学研究費補助金基盤研究(C)「沖縄久米島の家系資料群の研究」(研究代表者小川順敬)に継承された。

(4) 東京大学史料編纂所架蔵史料を中心に、内地寺院所蔵・旧蔵の近世期琉球寺院関係文書の調査を行った結果、本研究の発展型として、科学研究費補助金基盤研究(C)「沖縄県外史料の蒐集と分析に基づく近世琉球寺院の社会的機能の解明」に継承された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- 1, 下郡剛、旧首里士族・照屋本家の家系復元—骨壺銘の検討を通して—、宗教学論集、査読有、30 輯、2011、79—99
- 2, 下郡剛、久米島上江洲家所蔵寺院関係文書について—観音靈籤の被占者と年次の検討を中心に—、久米島自然文化センター紀要、査読有、10 号、2010、1—19
- 3, 下郡剛、院評定について、日本史の研究、

査読無、230 号、2010、31—35

- 4, 下郡剛、近世琉球社会における臨濟宗寺院と葬送・追善仏事、立正史学、査読有、105 号、2009、23—39
- 5, 林讓、禅僧の花押について—宗峰妙超等を事例として—、広瀬良弘編 禅と地域社会、査読無、2009、122—138
- 6, 林讓、大江広元とその筆跡、湯山賢一編 文化財と古文書学—筆跡論、査読無、2009、35—72
- 7, 林讓、源頼朝第一筆蹟について—筆跡研究の可能性—、鎌倉遺文研究、査読有、23 号、2009、1—24
- 8, 林讓、史料紹介『薩戒記』嘉吉三年六月条抜粹—上人号勅許とその文書に関連して—、時衆文化、査読無、20 号、2009、169—174
- 9, 下郡剛、近世琉球社会における真言宗寺院と占いについて (第 10 回日本道教学会賞受賞論文)、東方宗教、査読有、112 号、2008、45—63

[学会発表] (計 3 件)

- 1, 下郡剛、日記に見える院宣について、国際日本文化研究センター共同研究日記の総合的研究、平成 22 年 12 月 18 日、国際日本文化研究センター
- 2, 下郡剛、近世琉球社会における臨濟宗寺院と葬礼・追善仏事について、平成 20 年度立正大学史学会、平成 20 年 6 月 22 日、立正大学
- 3, 下郡剛、近世琉球社会における真言宗寺院と占いについて、日本道教学会、平成 19 年 11 月 10 日、浦添市産業振興センター 第 58 回大会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下郡 剛 (SHIMOGORI TAKESHI)
沖縄工業高等専門学校、総合科学科、准教授、研究者番号：50413886

(2) 研究分担者

林 讓 (HAYASHI YUZURU)
東京大学、史料編纂所、教授
研究者番号：00164971

(3) 研究分担者 なし